

聖書: ヨシュア記 21 章

説教題: 一つもたがわず

日 時: 2010 年 9 月 19 日

今日の記録はレビ人の町についてです。レビ族が自分たちの相続地を持たないことについては、このヨシュア記でも繰り返し述べられて来ました。13 章 14 節、33 節、14 章 4 節。特に 13 章 33 節に、彼らの相続地は主ご自身であるとありました。彼らは特別な意味で主に仕え、イスラエル全体の礼拝生活を支える部族として、主に取り分けられた部族です。その霊的な奉仕に当たる者として、彼らはイスラエルの神・主こそを自分たちの相続地とし、目に見えるカナンの土地は相続地として持たないのです。しかしそのように主に献身する彼らであるとは言え、この地上で生活するための場所は必要です。霊的な働きをする人たちだからと言って、物質的な支えは要らないのではない。やはり彼らにも住むための町が必要であり、また生活のための家畜とその放牧地が必要です。そういう彼らの地上的生活への配慮がこのように旧約聖書でもきちんとなされています。

このレビ人の町については、2 節にありますように、モーセの時代にすでに命じられていました。民数記 35 章に 6 つののがれの町と、他に 42 の町を選び、合計 48 の町を放牧地付きでレビ人に与えるように言われています。その 48 の町が今日のヨシュア記 21 章で決定されます。これらの地名を見ると、彼らにも随分多くの場所が与えられたような気もしますが、民数記 35 章を参照すると、彼らが受けた町の大きさは一辺が 2,000 キュビトの正方形のようなものであったと考えられます。1 キュビトは 44 センチですから、2,000 キュビトは 880 メートル。つまりレビ人の町の面積は 1 平方キロメートル弱になります。ですからある町がレビ人の町と指定されても、ごく一部がそのように指定されたに過ぎません。そうでなければ、カレブが与えられた町ヘブロンもレビ人の町とされていますが、カレブの立場はどうになってしまうのか、ということにもなります。そしてこの 1 平方キロメートル弱の町が 48 個あっても、合計 40 平方キロメートル程度にしかならず、これは約束の地全体の面積から見たら 0.1% にしかならないようです。すなわちたくさんリストされても、広い土地になるわけではなく、生活に必要な程度の場所だけであった、ということになります。

さてレビ族には 3 つの氏族がありました。ケハテ族、ゲルシオン族、メラリ族の三つです。この内、ケハテ族はアロンの子孫とそうでない者とに分けられます。そしてアロンの子孫は、他のレビ人とは区別されて、祭司の務めを受けました。彼ら祭司は主なる神とイスラエルの間の仲介者として、いけにえをささげる働きを委ねられました。そして他のレビ人たちは、祭司の働きを助け、幕屋を管理・保護したり、律法を教えたりなどの奉仕に当たりました。こうしてレビ人は計 4 つのグループに分かれることになります。そのそれぞれのグループがどのような町を指定されたのか、まず 4~7 節で大枠で示され、8 節以降で具体的に一つ一つの町がリストされる形になっています。

まず最初はケハテ族の中のアロンの子孫についてです。4 節にありますように、彼らにはユダ部族、シメオン部族、ベニヤミン部族の中から 13 の町が割り当てられました。約束の地の一番南側の地域です。その具体的な町々が 8 節以降に示されています。まずのがれの町であるキルヤテ・アルバすなわちヘブロン。カレブに与えられたこの町はのがれの町であり、かつレビ人の町とされました。その他、イスラエルがカナン南部連合軍との戦いで得た町リブナ、カレブの兄弟オテニエルが攻め取った町デビル、また遠くからやって来た振りをしてイスラエルと平和協定を結んだあの王国の都のような町ギ

ブオンなどが指定されました。

次はケハテ族の残りの者たちに対して。5 節にありますように、彼らはエフライム部族、ダン部族、マナセの半部族から 10 の町々を受けました。約束の地の中央部です。ここに含まれるのがれの町は、21 節にありますように、かつて祝福とのろいの律法が読み上げられたシェケム。その他、急な坂を下っていた時に大粒の雹が天から降って来て、敵の上にだけ命中した町ベテ・ホロン、ヨシュアが「月よ、その上で動くな」と祈ったところのアヤロンなどがありました。

三つ目のゲルシオン族は、6 節にありますように、北方のイッサカル、アシェル、ナフタリ、そしてヨルダン川東側のマナセの半部族から 13 の町を指定されました。ここにはのがれの町が二つ含まれていて、27 節にあるように一つはヨルダン川東側のバシヤンにあるゴラン、もう一つは 32 節にあるようにヨルダン川西側のガリラヤ湖北部の町ケデシュ。他にはかつてバシヤンの王オグが住んでいた首都アシュタロテ、ここでは別名のベエシュテラと記されている町が含まれていました。

そして 4 つ目のメラリ族には、7 節にありますように、ルベン、ガド、ゼブルンの部族から 12 の町々が与えられます。ここにものがれの町は二つあり、一つは 36 節にあるようにルベン族のベツェル、もう一つは 38 節にあるようにガド部族のギルアデのラモテ。他にはかつてエモリ人の王シホンが住んでいた都ヘシュボンや、家畜を買うにはもってこいの土地ヤゼル、そしてイズレエル平原に位置するヨクネアムなどがありました。

こうして「レビ人の町」の割り当て作業が終わった後、43～45 節では、主の約束がことごとく実現したことがくどいほどに繰り返して述べられています。「こうして主は、イスラエルの先祖たちに与えると誓った地をすべて、イスラエルに与えられたので、彼らはそれを占領して、そこに住んだ。主は、彼らの先祖たちに誓ったように、周囲の者から守って、彼らに安住を許された。すべての敵の中で、ひとりも彼らの前に立ちはだかる者はいなかった。主はすべての敵を彼らの手に渡された。主がイスラエルの家に約束されたすべての良いことは、一つもたがわず、みな実現した。」ある人はここを読んで、疑問を持つかもしれません。確かこのヨシュア記では彼らの征服が十分でなかったことも繰り返し語られて来たのではなかったか。約束の成就是まだ部分的だったのではないか。そのこととこの 43～45 節は調和しないのではないかと。しかし結論から言えば、もちろん矛盾ではありません。後の 23 章にはヨシュアの説教が記されていますが、その章の 14 節でヨシュアは今日の章とほぼ同じことを語っています。「主が、あなたがたについて約束したすべての良いことは、一つもたがわず、みな実現した」と述べています。そのように言いつつ、彼はたとえば 12 節で、まだこの土地の中には追い払うべき国民が生き残っていることに触れて、彼らと交わる危険性について警告しています。ここから分かることは、ヨシュアはこの地に追い払うべき民が全くなくなったという意味で、主の約束が最後までみな実現した、と言っているのではないということです。まだ取り組むべき課題、仕事はあるのです。しかしここまでの導きを振り返ってみる時、確かに「主が約束されたすべての良いことは、一つもたがわず、みな実現した！」と言わずにいられない状況があった。特に今日の章の 43 節以降の言葉を良く見ると、イスラエルの先祖たちになされた誓いに照らして、このことが言われています。そのことを少し振り返ってみたいと思います。

最初、この約束が与えられたのはアブラハムに対してでした。主は彼をカナンの地に導き、創世記 12 章 7 節で「あなたの子孫にわたしはこの地を与える。」と言われました。しかし彼が得たのは妻を葬るための一片の畑地と洞穴だけでした。しかも彼は自分のお金を払ってそれを買いました。その約束

は続く父祖たち、イサク、ヤコブ、ヨセフと繰り返されました。そして旧約聖書の最初の 5 つの書、すなわちモーセ五書全体がその日が来ることを指し示し続けました。そしてこのヨシュア記。アブラハムの子孫イスラエルは、カナン先住民の積もり積もった罪に対する主の裁きの使いとしてこの地に入って来て、次々に勝利しました。そして前半最後の 12 章に、「打った王たちは次の通り」と一覧表が記されました。そして 13 章から土地の分配が始まりました。今日の 21 章まで、ページをめくっても、めくってもカタカナばかりで、私たちにとってはきつい箇所でした。しかし前にも触れましたように、この相続地のリストこそヨシュア記の中心的箇所です。ヨシュア記は一言で言うなら「成就の書」です。約束が実現したことを高らかに歌っている書です。ですから著者は一つ一つの町を、神が与えて下さったプレゼントとして、愛着を持って漏らさず数え上げているのです。そして 12 部族の土地の割り当てばかりでなく、カレブとヨシュアが地を受けることも、またツェロフハデの娘たちが割り当て地を持つことも、また逃れの町についても、レビ人の町についても、ヨシュア記に先立つ 5 つの書ですべて約束されて来ました。それらが一つ一つこのヨシュア記で現実となり、ついにレビ人の町の割り当ても終わったのです。この時にふさわしい言葉は何でしょうか。それはここにある「主が約束下さったことはみな実現した！」という言葉以外の何でしょうか。まだ取るべき地があるとは言え、そのことは今述べて来たことを何ら否定するものではありません。確かにこれまでの導きを振り返る時、主が約束されたすべての良いことは、一つもたがわず、みな実現した！と言わざるを得ないのです。

私たちはこのみことばを味わう際、ここに至るまでには多くの障害、困難があったことも良く考えに入れるべきです。先に述べたように、アブラハムは一片の土地しか所有しませんでした。彼は子孫が 400 年間、自分の国ではないところで苦しめられるという主の言葉を聞きました。そしてイスラエルは確かにエジプトで奴隷状態に置かれました。一体アブラハムへの約束はどこにあるのか、救いはどこにあるのか、と言いたくなる状況でした。しかしモーセによってイスラエルはついにエジプトを出ます。そんな彼らに待っていたのは荒野の生活。本来はすぐにも約束の地に入れたのに、民の不信仰により、なお 40 年間の放浪生活を強いられました。そしてやっとこの地に入って来てからは次々に激しい戦いがありました。しかしこの時、イスラエルはどういう状態にあったでしょう？何と彼らはカナン全土を領有しています！そして各部族は割り当て地を持ち、主が約束されたすべての取り決めも実現しました！このことを振り返る時、そこに浮かび上がって来ることは、主の驚くべき真実さです。どんなに私たちの目に困難に見えても、時満ちて必ず誓いを果たして下さい。イザヤ書 55 章 10 節にこうある通りです。「雨や雪が天から降ってもとに戻らず、必ず地を潤し、それに物を生えさせ、芽を出させ、種蒔く者には種を与え、食べる者にはパンを与える。そのように、わたしの口から出るわたしの言葉も、むなしく、わたしのところに帰っては来ない。必ず、わたしの望むことを成し遂げ、わたしの言い送ったことを成功させる。」

そしてこのことはこれから先の歴史においても、主が同じように約束を成就して下さいを指し示すものです。主はやがてあらゆる敵から私たちを守り、私たちを約束の御国へ導き入れて下さいます。今日の章に記されていることは、その将来の主が成し遂げて下さることの前触れです。その主に目を上げて、心強くし、主に従って行くべきことをこの章は私たちに語っています。

私たちの毎日の生活にも困難がたくさんあるかもしれません。主の約束を聞いても、現実は何も変わらないように思うかもしれません。そんな主の言葉より、他のものの方が力あるように見えるかも

しれません。しかし主なる神は「成就の神」。目の前にどんな障害があろうと、それらを乗り越えて、ついに約束実現へと導いて下さるお方。私たちはその主に信仰の目を上げさせられたい。私たちも主に導かれて、やがて今日の章の43～45節のように告白する日が導かれるのです。人間の目に今そう見えなくても、必ずこのように賛美できる日が来るのです。「主が私に約束されたすべての良いことは、一つもたがわず、みな実現した。」 その究極の祝福の日が来ることを望み見つつ、楽しみにして、真実な主に信頼して従う望みと力に溢れる生活へ今週も導かれて行きたいと思います。